

アートセラピーセンターDiDi インターナショナル

アートセラピーセンターDiDi インターナショナルは、2004年6月に、チェチェン難民の子どもたちのためのアートスタジオとして始まりましたが、単一民族のセンターという性格は3か月で終わりました。まず、精神的、肉体的に問題を抱えたアゼルバイジャン人の子どもたちが加わって来て、さらにトルコ、イラン、モロッコ、カナダ、インド、アメリカ、フランスなどからの子どもたちが参加したからです。グループの構成は、子どもたちの国籍や出身階層がまちまちであるだけでなく、年齢もまちまちでした。

子どもたちの多様さについて語ると、とても長くなりますが、スポーツ好きの敏捷な少年もいれば、障害を抱えて車いすに座ったままの少女もいました。5か国語を流暢に喋ることのできる子どもがいる一方で、精神的な病を患っている子どももいました。DiDiへの参加者で、最年少の子どもは、私たちの舞台に初めて立った時、2歳半に過ぎませんでした。一方、最年長の子どもは16歳でした。こうした色々な子どもたちが、一緒に学び、成長していったのです。私たちの活動は、ビデオや写真に記録され、参加する心理学専門家や教師によって観察、検討されて来ました。新しいシーズンの始まる2011年の秋に、DiDiの経験を拡大して、さまざまな子どもたちのグループを呼び込もうと決めました。いわば「外部の」ハンディキャップを背負った子どもたち、—身障児寄宿学校や、職業的な体育・音楽センターなどの子どもたちも、DiDiに参加させようというものです。

私たちの課題は、次のようなものでした。まずグループ分けした子どもたちそれぞれ別個に、同一のプログラムで稽古します。そして、次第にグループを統合して行って、最終的に一つの集団パフォーマンスに仕立てるというものです。こうして、2012年6月、DiDiの子どもたち127人による国際子どもの日記念のする出し物が、完成したのです。舞台には、聾啞の子どもたちや、視覚障害の子どもたち、ダウン症の子どもたち、自閉症や脳性麻痺の子どもたち、体操学校の子どもたちや、アクロバットの訓練を受けた子どもたち、音楽学校の生徒たちが、一緒に上がったのです。ミュージカルのフィナーレに至るまで観客は、舞台上の、どの子どもが、どんなグループに属しているのか、判りませんでした。というのも、演出上の思いつきで、参加者全員が、同じような仮面をつけていたからです。

DiDi インターナショナルは、小さな多文化・多民族の島として、さまざまな社会的、宗教的、政治的、心理的問題と厳しく衝突してきました。急進的なイスラーム主義者の一家の子どもは、音楽や踊りを禁じる父親のもとから、稽古に参加するため家出てきました。子どもたちの間で

は、「神様は、本当にいるのだろうか？何で、色々な呼び方をされるのだろうか？」とか、「気に入らない連中を、みんなロケットに詰め込んで、宇宙のかなたに打ち上げてしまえないのだろうか？」といったことが論議されました。

初期の出し物の一つは、アンデルセンの童話によるミュージカルでしたが、それぞれの登場人物描くのに、さまざまな曲を使ってみたのです。フランスのワルツ曲、ギリシャの舞曲シルタキ、サンバにフラメンコ、アイルランドのジグ、そしてもちろんクラシックも、モーツァルトにシューベルトも使いました。これらの曲にあわせ子どもたちは歌い、踊ったのですが、とても大事なことは、子どもたちが自分たちの役にあったように、それらを生き生きとさせて行ったことでした。今でも、彼らは、バッハのブランデンブルグ協奏曲を聴くと、歓声を上げて私たちのやった新年の雪のテーマだと叫びます。

一つの出し物への、このような様々な音楽作品の気ままな選択は、一見奇妙に感じられるかもしれませんが、これらの音楽を子どもたちが、好きだったからということで説明できるかと、思います。そして、これからも愛し続けることでしょう。そして私たちは、この手法を、より選択的に利用してきました。時には、クラシック曲の幾つかの短いセグメントを意識的に強調しました。「星の王子さま」のサウンドトラックには、ミンクースとグリーグの楽曲のみを使って、子どもたちにこれらの音楽に対する理解を深めました。

DiDi インターナショナルの芸術リハビリテーションを経験した子どもたちの多くは、今ではヨーロッパの国々、カナダ、米国などに移住しています。(2012 年秋)2 か月ほど前のことですが、両親とパリで暮らしているトルコ人の女の子が訪ねてきました。彼女は、既に大きな抱負と独自の意見を持った十代の少女になっていました。この一家は外交官で、難民ではありませんが、彼女たち、DiDi の卒業生たちは、引き続き、インターネットや、ソーシャル・ネットワークを通じて連絡を維持し続けているということでした。トルコのお客さんがいうには、「みんな、お互いのことが大好きだから。でも、他の子たちは、そういうこと学ばなかったから、うまくできないみたい。」この子どもの結論と評価は、現代社会への大切な行動の処方箋として「愛することを教える」ということが、あげられると思うのです。

この世界には、大変多くの児童や青少年のための組織団体があり、子どもたちのために活動している真面目な大人たちがいます。彼らは、実に多様な政治組織や、平和団体や、環境保護団体、さらには軍事・体育団体に至るまでの組織に属しています。アートセラピーは、いまのところ、

特定の年齢、症状、社会的な階層や職業的集団と言った、分野で具体的な問題を抱えた人々が、集まって取り組んでいるという状況です。

8年半にわたるさまざまな背景の子どもたちとのアートセラピーの実践による肯定的な経験により、私は、子どもたちの抱えるいろいろな問題の心理的リハビリテーションとより完全な社会的統合について、楽天的に思えるようになりました。私たちのセンターには、先天的な運動筋肉障害と深刻な心理的問題を抱えた少年がおりましたが、稽古に参加して1か月すると、自分は、この踊りがとても気に入っている、だから自分も踊りたいと言いました。

彼は、大観衆の前で、その踊りが彼の肉体的可能性よりはるかに複雑で、異国の異民族の中にも、ひるまず踊りを続けました。彼は、「できるのか？」という問いを「やりたい」に代えたのです。キーワードは、「好きだ」であり、「愛する」ということでもあります。

子どもたちは、周辺で起こっていることにとても敏感で、社会の影響を強く受けるものです。ですから、アートセンターにやってきた時には、彼らが感じとっていた周辺の大人たちの世界の小さな投影機のような状況ですが、時を経ると、今度は、新しい状況の反映が見られるようになります。センターには、子どもたちの両親をはじめ、教師や、年長の親戚が、稽古を見学させてくれとやってきたり、質問を寄せてきたり、子どもたちがいかに変わったかを話してくれます。DiDiの二つの大きなプロジェクトでは、子どもたちと一緒に、こうした両親や、教師たちが、同じようにメーキャップを施し、舞台衣装を着て、舞台に上がりました。最年長の参加者は、76歳でした。

子どもたち、両親、アートセラピスト、ボランティア、すべてのDiDiインターナショナルに加わっている者は、自分たちを地球市民であると考え、それを必要とする人々を支援し、理解し、支えあおうと考えています。私たちは、「憎む」という言葉と決別して、それを「気にならない」という気持ちに変えました。「悪い」というかわりに、「別の、違う」という理解にかえました。私たちは、この世界を、私たちの文明が創造した全ての素晴らしいことを愛すること、誇り高く自分たちが人間であることを学んだのです。

アートセラピーセンターの方法論、手法や原理については、より詳しい、順序を踏まえた記述が必要です。というのも、私たちの活動には、従来の臨床心理学者やアートセラピストによる良く知られた知見に加えて、自分たちの長年にわたる子どもたちに対するアートセラピー活動で得

られた、ノウハウが含まれているからです。現在、DiDi インターナショナルの実戦的経験に基づいた、アートセラピーの方法論についての解説書の刊行が準備中です。

現在、UNICEF のプロジェクトとして、米国とアゼルバイジャンの心理学協会の専門家が私たちのセンターの活動に参加して、アートセラピー方法論の体系化と分析を進めています。

DiDi インターナショナルの活動は、次のような諸団体から高い評価をいただいています。

NRC ノルウェー難民評議会

国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR)

ソロス基金 (開放社会財団)

米国セーブ・ザ・チルドレン

スイス連邦大使館

ノルウェー大使館

ドイツ連邦大使館

国際ロータリークラブ

オックスフォード・スクール(米国)

TISA センター

ノルウェー、ベルゲン・ロータリークラブ

UNICEF(国連児童基金)

今日、私たちのアートセラピーセンターでは、基本的な子どもたちへの活動と並行して、2010年10月に始まって、一部は、2011年6月に結実した、活動拡大につながるトレーニングが行われております。DiDi の領域は拡大を続けています。当初の子どもたち20人が、35人になり、50人になるといった具合に。現在は、心理的障害を持つ子どもたち、視覚、聴覚、発声障害児など、幾つかのグループに分かれています。総勢150人に達します。そして、次の成果発表は、これまでやってきた伝統により、2013年6月の学期の終わりに、社会的に色鮮やかなパフォーマンスとして、盛大に公開されます。

2013年1月 ザーラ・イマーエフ

(アートセラピーセンターDiDi インターナショナル創業者)

翻訳：岡田一男